独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (C)

「子どもの非行・虐待防止のための地域社会ネットワークの実証的研究」報告

神奈川県内におけるスクールサポーターの 活動の現状と課題

(神奈川県警察A警察署スクールサポーター)

(神奈川県警察B警察署スクールサポーター)

(神奈川県警察C警察署スクールサポーター)

本報告は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (C) 「子どもの非行・虐待防止のための地域社会ネットワークの実証的研究」(課題番号: 24530074) の一環として、2013 (平成 25) 年 3 月 14 日 (木) に「かながわ県民センター」にて開催された研究会の記録である。

- 1 進行説明・導入
- 2 A警察署所属スクールサポーター報告
- 3 B警察署所属スクールサポーター報告
- 4 C警察署所属スクールサポーター報告
- 5 総括質疑

1 進行説明・導入

石川：それでは早速始めたいと思います。出席者は別添（後述）のとおりですので、自己紹介は省きたいと思います。

2 A警察署所属スクールサポーター報告

管内には、学校や幼稚園などが70か所程度あり、これを対象に仕事をしています。

平素の私の仕事内容は、まず朝8時ちょうどに各学校の小学校・中学校の正門に行って、朝のあいさつ運動をするとともに、登校時の見守り活動を毎日実施しています。その後、訪問した学校に立ち寄って、学校長や専任の教諭と情報交換をしたり、校内を巡回するなどして生徒の指導をしている学校もあります。その後、警察署に行ってその日の管内の犯罪情勢を収集し、勤務日程等を作成しています。午後の活動は、通学路の点検と、不審者徘徊の有無、下校時の見守り活動、公園などの巡回を実施しています。

年間では、毎月1回実施される児童支援生徒指導専任教諭協議会に必ず出席するようになっていきますので、毎月、先生方と打ち合わせをします。主に小学校の先生のブロックを担当して、中学校は少年の係長に依頼してあります。年に不審者対応訓練を学校からの依頼により2回から3回実施しています。

それから、非行防止教室、交通安全教室、地区の防犯会議、町とともに歩む懇話会（略して町コン）のほうに出てお話ししています。あとは、授業参観やフェスティバルといって、小学校の文化祭・運動会等に出席して活動しています。そのほか、4月から、学童の通学路の点検の関係で、スクールゾーン対策協議会というものを交通とタイアップして、その通学路がどのような状態になっているか、通学路の点検等をやっています。

次に、活動上の評価的なところですが、中学校からは朝のあいさつ運動については、好評を受けています。学校内の巡回については校長の要望により2校から3校で実施しており、やや好評であるのではないかと自分では思っています。

小学校の反応については、朝のあいさつ運動について非常に好評を受けて

います。

また、不審者対応訓練や防犯教室、非行防止教室については「非常にやってもらいたい」という要請が来ますので、好評であると思います。

次に、自分が関与して取り扱った事案内容からということで、一応、2点から3点抜粋してみました。某学校の事案です。教室内で一つのグループがある生徒にいつもいやがらせをし、生徒の友達とそのグループがトラブルになりました。それ以降、そのグループが授業妨害や問題行動を繰り返すようになり、学校の先生が困って警察の少年係に相談に来ましたので、私のほうですぐさま何らかの対応をしなければいけないことになりました。

まず、その学校を訪問して、校長、副校長、生徒指導の専任教諭などと対応を協議して、私と少年補導員さんの数名が朝のあいさつ運動から入って活動を開始したほうがいいということになりました。そして、それが終わった後に学校内を巡回して、少し暴れている生徒には生徒指導を行います。PTAや保護者から問題が出てくるので、とりあえず私と少年補導員、それから学校長、副校長、PTA会長、PTAにも来てもらって、「一応こういうかたちなので学校内を巡回します。できれば、PTAも合わせてやってください」と依頼して、そのPTAにも巡回してもらいました。

そして、生徒たちが安心感を持てたらしくて、皆、穏やかな表情に変わってきたということです。それからそういう生徒間のけんかなども収まってきたという状態です。いい成果が上がったのではないのでしょうか。幸い、無事卒業式までこぎつけることができました。

あともう1件は、いじめを発端とする内容から、一部の保護者や生徒などから担任へのバッシングが始まって、落書き・粗野な言動が連発するなど、学級崩壊とも思わせるような行動が発生して、学校長と専任の教諭から私に相談がありました。それで、その事実がどのような状態なのか確認しなければいけませんので、校長にお断りして、様子を約1カ月見てやったところ、やはり粗雑な扱いをしたり、粗悪な言動で先生をなじることが見受けられました。

学校も臨時保護者会を開く日程が決まりましたので、後日行われた保護者会で、約1カ月近く私が昼の時間帯に見聞きしたことを保護者に言ったとこ

ろ、その後学校側から「少しずつ改善されてきている」という旨のお礼の手紙が当警察署宛てに学校長から届きまして、かなり効果を得たということがありました。

スクールサポーターの活躍を紹介した新聞の切り抜きを配布資料に入れています。たまたまその学校の校長先生が、私に宛てたのではなく学校の自分のところの職員に、スクールサポーター、要するに、「校内巡回指導に活躍」というこういう新聞を読んで、「スクールサポーターが一生懸命やってくれて収まってきたんだよ」と先生方にも披露したということを聞いています。

3 B警察署所属スクールサポーター報告

管内は学校や幼稚園などが 80 か所ほどあり、誘拐防止や非行防止教室や相談などでかかわることができました。

「児童の安全確保に関する学校などに対する支援」というのは、児童の安全確保に関する支援として、地域安全マップの指導を行っています。地域安全マップというのは、入りやすくて見えにくい場所を、子どもたちと一緒に町探検をしてチェックし地図を作ります。犯罪防犯マップだけではなく、災害時の危険箇所・広域避難場所・消火栓・備蓄倉庫などの場所を確認する災害時安全マップも市の防災担当者の人と連絡を取りながら一緒に進めていきました。子どもたちが自分たちの町を見直して、防犯・防災に関心を持つ機会を提供することができたのは、とても良かったと思います。

ほかにも、園児や小学生を対象に、あるいは先生を対象として、学校不審者侵入時対応訓練や護身術指導をしています。さすまたや護身術の指導は警察官に指導をお願いしてもらって、私は女性の立場と視点で、被害に遭わないようにするためにはどうすればいいのかということを防犯指導させていただきました。

必ず駐在さんに声を掛けて一緒にやらせてもらうようにしています。駐在さんのような身近な警察官に対応してもらうことで、学校もより安心感を持ち、子どもたちも顔なじみの駐在さんなので真剣に取り組んでいる様子が伺えました。

次に、「地域安全情報などの収集・提供」は、地域の育成会の会議や幼児・

児童・生徒指導連絡協議会に出席したりスクールサポーターだよりを発行して、学校や地域のほうに情報提供を行っています。

また、要保護児童対策地域協議会にも出席し、要保護児童・要支援児童の把握と連携確認を行っています。生徒や児童に接触することも多いのですが、行政主催の会議に出席することで子どもたちの現状を把握しています。

次に、「非行・犯罪被害防止教育の推進」についてお話しさせていただきました。非行防止教室は、子どもたちの身近な犯罪である万引きや自転車盗、いたずら電話などの軽犯罪法や、最近特に問題になっているインターネットに関する犯罪を、小学校や中学校に行ってパワーポイントを活用しながら話をし、規範意識の向上に努め、保育園や幼稚園では、子どもたちの興味を引き出しやすい紙芝居などを活用して、「やっていいこと悪いこと」を教えます。学童クラブでは遊びの延長として、非行防止かるたを活用した非行防止教室を行っています。

子どもたちの年齢に応じて、いろいろと工夫しながらやらせていただいているので、子どもたちの反応も非常に良く、子どもたちからは「こんなことが罪になるとは知りませんでした」と、後で感謝の手紙や感想文をいただくことがあります。こういう活動を通じて、1人でも多くの子どもたちが、「やっていいこと悪いこと」について理解し、自らの規範意識を高めてもらいたいと思っています。子どもながらに真剣に書いてくれた子どもたちの感想文を読ませていただくと、私自身この仕事に携われて本当に良かったなと感じています。

ほかにも、私が普段から取り組んでいる活動として、誘拐防止教室や薬物乱用防止教室、サイバー犯罪防止教室などがあります。スクールサポーターだけで行えるものもあるのですが、地域警察官や暮らし安全指導員、そして少年補導員、あるいは、高校生と連携しながらそのような活動をやらせていただいています。

また、私が特に力を入れているものの1つに、高校生による非行防止教室があります。小学生の子どもたちにとって、年齢の近いお兄さんやお姉さんから、「落ちているお金を警察に届けなくて、自分のものにするのは罪になるんだよ」という、「やっていいこと悪いこと」を説明することは、大人の私

たちが同じことを伝えるよりはるかに効果がある場合があります。

そして、このことは高校生にとっても、人にものを伝えることに対して自信がつくと思いますし、情緒教育の一環として非常にいいことだと思っています。そもそも、高校生に非行防止教室をお願いしたことのきっかけですが、文化部の生徒さんの活躍の場を提供したいということでした。

教材は少年育成課の紙芝居が元になっていますが、それが実際に劇となると高校生の工夫が凝らされ一層良くなって、小学生の子どもたちも非常に喜んで、小学校のほうでも「今年も是非来てください」とお願いが来るほどです。

私が最初に提供した教材を子どもたち自らが段々、年を重ねるごとに自分たちで工夫して、さらに子どもたちに分かりやすく、あるいは「表現はこういう表現ではなく、もっとやわらかい表現がいいのではないか」などと、小学生をひきつけるように言い回しを自分たちで工夫したり、あるいは実際にその紙芝居に出てこない人気アニメのキャラクターを加えるなどして劇を進めていくのですが、笑いを誘ったりメリハリを付けて、毎年バージョンアップしていきます。私も拝見させていただいて、とても心強く感じています。

現在、協力してくれているのは、管内の5校のうちの2校ですが、もっと多くの学校に参加してもらって、今は高校生だけですが、特に中学生に協力が得られればいいなと思っています。そして、たくさん子どもたちに「自分たちは社会の一員である」という自覚と「社会に貢献した」という達成感を味わってもらいたいなと思っているので、今後も積極的にアプローチしていきたいと思います。

サイバー犯罪被害防止教室は少年補導員さんと協力してやらせていただいています。この少年補導員さんですが、少年育成課のほうでNPO 法人とタイアップして、少年補導員さんに研修を受けてもらってサイバー・セーフティアドバイザーの認定をしていただいています。その方々と新聞の切抜きを集めたり、ニュース等で取り上げられている問題点をいろいろ話し合いながら、オリジナルの教材を作っています。

少年補導員がサイバー・セーフティアドバイザーに認定されているのですが、非常に熱心です。

今年は多くの保護者の方に危機感を持ってもらうために、中学校の新入学説明会で講演させてもらうことができとても良かったと思っています。

スクールサポーターの主な活動は学校訪問なのですが、学校訪問に行く際には必ず県警から出ているチラシや『スクールサポーターだより』を持参して、話題づくりに役立てています。学校からの相談は必ず自分だけで解決しないで上司に報告して、少年係として対応し、時には少年相談・保護センターとも相談をさせていただいています。

私はもう6年間、スクールサポーターとして活動しているのですが、異動のある警察官とは違い、地域にじっくり腰を据えてさせていただいています。ですから、先生方とのつながりも強く、子どもが小学校・中学校とどんどん成長していく段階も見ているので、それも非常にいいなと思っています。学校からも、「このスクールサポーター制度ってとてもいいですね。警察との敷居が低くなって、何かあったらすぐに相談できて、とても助かります」と非常に喜ばれています。

大まかですが、スクールサポーターの4つの活動の柱に沿って説明させていただきました。他にも学校から「こういうことをやってもらえないですか」といろいろな要請がありますが、できる範囲で努力させていただいています。それだけにこの仕事というのは、幅が広くやりがいのある仕事だと感じていますし、これからも地域の子どもたちのために一生懸命頑張っていきたいと思います。

私自身も、警察官を拝命したときに少年の仕事をやりたかったのですが、実際は交通の仕事で退職して、志半ばで退職してしまうことになったのですが、またご縁あってこのような仕事をさせていただいたことに非常に感謝しています。配布資料の末尾に『スクールサポーターだより』と児童からの感想文を添付させていただきました。参考までにご覧になっていただきたいと思います。

これで私の発表を終わりにします。ありがとうございました。

4 C警察署所属スクールサポーター報告

私はこれまでは警察官として少年の取調べ、事件の立件送致というところ

に携わっていましたが、今度は警察手帳もすべてお返ししたので、どうすればいいのかなと最初に悩みました。スクールサポーターの仕事は分かるのですが、自分で何をすべきなのかということが分かりませんでした。警察官をやっているときは小学校はほとんど事件に関係がないので場所が分かる程度でした。小学校を主体として回るということの指示は受けているのですが、どうすべきかということを考えました。その結果、まずは自分の顔を売ろうと思い、小学校には何にもなくても「スクールサポーターです」と言って月に2回、多いときは月に4回ぐらい回りました。

それで顔を売って、だんだんと先生方のほうにも知られてきて、毎月、児童支援と中学校の専任とで集まる会議があるのですが、そこで学校の情報交換があります。それで話がいろいろ出ていく中で、私は何をすべきかということで、警察署で扱った事案などを把握して、特にその小学校に必要な部分があれば、それをメモして、その小学校に訪問して話します。

そのようなところからまず始まっていった、顔を売って、少年事案について相談を受けることがあれば、助言指導をして、1年間で信頼をだいぶ勝ち得てきました。

その中で、非行防止教室と、先ほどあった不審者訓練のほか、薬物乱用防止教室などをやっていたのですが、いかんせん今まで警察官だったもので、あまり話すのが得意ではありません。特に、子どもたちの前で話すというと緊張しますので、真面目な顔が皆一線で来ると話したいことが話せなくなるというのが悩みの種でした。

そこで考えたのが、警察官の人で話がうまい人がいます。例えば、こちらの少年相談・保護センターにいる方は非行防止教室が得意です。私の後輩に当たりますから、「お願いできないですか」と、何かあると頼んで非行防止教室をしました。

そのほかに、暮らし安全のほうからの依頼で、誘拐防止教室を開催することとなりました。誘拐防止教室というのは1年生・2年生限定で着ぐるみを着てやるものなので、低学年にはすごく評判が良いです。動物が出てきて「ついてっちゃん駄目だよ」という易しい話を元学校の先生がやっているの、皆すごく注目して、キャーキャーワイワイという教室をやっていました。

それでは、それ以外の高学年はどうするかといいますと防犯教室というのがあります。それは「自分の身は自分で守ろう」というところから意識付けをしていこうと、高学年の子にはそういう教え方をしました。

ですから、小学校からだんだんそのような注文が多くなってきて、黙って署にいても電話が掛かってくるような状況になってきました。そのほかにもうちには高校が数校あるので、ある高校に「高校生に非行防止教室をやらせてもらえませんか」と頼みました。「すぐ隣に小学校があるので、その学校との交流関係はどうですか」、「英語のいろんなことをやっていますよ」、「じゃあ、非行防止教室もやりましょう」という話から、少年育成課員にレクチャーをしてもらいました。高校生は一生懸命練習して、小学校に行って教えてもらいました。

そうすると、子どもは大人が指導するのではなくてお兄さんから教えてもらう視点がすごくいいわけです。そして、高校生のほうも、将来は教育の場に立つかもしれない、そのような勉強の一環ということで、それも行いました。

それでは、次に何をやるかと考えて、今度は中学生です。小中一貫ではありませんが、中学生は小学校を卒業して同じ中学へ行きます。その中学校は、自分が卒業した小学校に行つて非行防止教室ができないかということで、学警連の顧問をやっている校長のところへ談判に行つて、「生徒に非行防止教室をやらせてください」と話して「仕方ないのでやってください」と、専任の先生たちとやりました。

そして、今度は紙芝居で小学校に訪問して非行防止教室をやってもらいました。

それができれば今度は、来年度はほかの学校も同じ小学校から中学校へ、ではそっちもやってもらおうという話を私がつけていけば、通じ合うので、それは良いということで、来年度はそれを少し増やしていこうということになりました。その先、できればさらにどんどんそれを広げていけばいいことであるのでそうやっていきます。そうすると、中学生の場合には本人の非行防止にもつながりますし、お兄さんが言ってくれる非行防止が身に染みてくるのではないかということで、それは1つ成功でした。

そのほかにも、専任会議などでは、去年辺りからよくネットへの書き込みなどがはやってきて、携帯によるトラブルというのが出てきました。それをどうするかということで、やはりこれは携帯のサイバー犯罪防止教室を実施することにしました。それ以外にも電話会社に頼んでやる場合もできてきました。

携帯電話というのは、保護者が子どもに買い与えるものです。それでは、保護者にはどうしようかと考えて、外国のテレビか何かで18の約束が出ていました。要するに、お母さんが誕生日か何かで携帯電話をプレゼントします。その際に、18の約束を子どもにしようと。それは、「私が買い与える。約束を守らなければ取り上げますよ」という文面をうたって、それを約束させて渡すというものです。私はこれを広めていけないといけないかなというところでは。

それと一緒にやはり、非行防止教室をやらせるためには、地域において高校と小学校は意外と、いろいろな意味でつながっているところがあります。高校にはボランティア部というのがあります。そういうものをうまく利用して広げていけばいいかなと思っています。これがうまくいけば、黙っていても私のところは電話1本で「ああ、そう。じゃあ行きますよ」と言って済ませられます。

そのほかには、相談があればどんどん助言していこうと思います。

相談の助言などは今までの警察官の経験を生かせるので、いくらでもできます。相談の内容によっては、これは事件として扱わなければいけないというものは、少年係で取り扱ってもらっています。

ただ、私はスクールサポーターとして、学校とのつながり、学校の相談に乗るなどメインとして活動しています。

今のところ結構信頼を得ていますので、良かったなど、第二の人生として少しは満足しているかなと思っています。ですから、まだクビにならない限りは活動していきたいなと感じています。

以上です。

5 総括質疑

石川：今、いろいろのお話を聞いていて、お聞きしたいことがいくつかあったのですが、細かなことはもう時間がないので大きなところだけ、お三方に共通してお伺いしたいと思います。

まず、WIPSS 紀要の来年号に特集を組みますので、この3人の方からこれからお話することを踏まえ、実践報告を投稿していただければと思います。

1つは、スクールサポーターという制度が2007（平成19）年度からやられたわけですね。神奈川県の場合はもう断トツに自立したネットワークを作られたということですが、これはお三方よりもまず、少年育成課の方の方がお詳しいでしょうか。最初は警察庁から声が掛かったわけでしょう。

それに対していろいろなところの反応の違いがあるのですが、神奈川県はすごく反応が早かったですよね。それで、いち早くそういうネットワークができたと思うのですが、それがどうしてかということをご可能であれば記載いただきたい。

次に、神奈川県警のほうで本制度を積極的に進められるというとき、当然、候補者選びがあるかと思いますが、それをどう選んだかということ。当然、選んでも「嫌です」と言う人もいれば、「やりたいです」と言う人もいます。その辺りの、やろうとしたきっかけがどうだったのかを三人にお伺いしたい。

初めての制度なので学校にとってみると、「何だ。警察といったって、元警察官じゃない。純然たるボランティアじゃないだろう」と思うこともあったでしょう。その辺りの経歴は「何だ、警察か」という意識を持つ学校の人がいても不思議ではなかったと思います。そういうご苦労が恐らくあったと思いますが、その辺りのご苦労もお聞きしたいです。

それから、特に今日、お二人の話された高校生の防犯指導教室です。最近、会津のほうに関心を持っています。今はNHKでドラマをやっているようで、私はまだ一度も見ていませんが、人偏に漢数字の十と書いて「什（じゅう）」という組織があることを知りました。これは日新館という藩校に関わるもので、そこは11歳から入れたようですが、それに入る前の武家の子どもたちを教育する、しつけをするためのものようです。

有名なのは最後の「ならぬことはならぬものです」というものです。それまでに、「年長者にはちゃんとお辞儀をしなさい」とか「年長者の言うことを

聞くのですよ」とか、そして最後のほうは「外で食べ物を食べてはいけません」とか、「女の子と外で口を聞いてはいけません」とかあったようです。時代錯誤の部分もあるのですが、「ならぬことはならぬものです」とあるのです。

その仕の組織というのは、大人が教えるのではなくて、年長の子どもが年少の子どもにそういうことを教えます。どのようなことをしているかという、最初に暗唱するそうです。仕の掟は七つあって、最後に「ならぬもの」ですが、これを入れると八つです。これを暗唱して、「今日これを背いた子はいますか」と言うわけです。正直に「ここや」と言うと、年長のものがピシッとこうやって御仕置きをし、最後に「ならぬことはならぬものです」と言って終わりにするそうです。

それが終わると今度、子どもたちは家に戻って食事前に切腹の練習をさせられたそうです。武士ですから。しかし、10歳前の子ですよ。すごいことをさせたなと思っています。

そういうことが昔あったことを踏まえて先ほどのお話を考えてみると、高校生が年少者に指導するというのは、ものすごくいいことだと思っています。これを中学生まで広めたいということですが、なおさらいいと思っています。これは両方にとっていいと思っています。教わるほうもそうですし、教えるほうも自分で襟を正さなければいけません。

うちの大学の総長は鎌田教授というのですが、最近はこの方が、安倍晋三首相が立ち上げた教育再生実行会議の座長を務めているようです。その中で議題に出てきているのが、道徳教育をとにかく学科に取り込もうということ。それ自体に反対するつもりはありませんが、それをどうやって取り込むかということを考えたときに、そう簡単ではないと思います。今のはヒントになると思います。

つまり、こんな私らのような大人が教えるよりは、中学生が小学校に行つてとか、あるいは、高校生が中学校に行つてという方が、両方が教わることができると思います。そのようなかたちで道徳の学科化というのであれば分かるのですが、もし一昔前の道徳教育のやり方を繰り返すようだと、あまり意味はないと思います。

特にそれを正式につけるということになると「何考えてるんだ」という話

になりますが、江崎さんが文部科学省の「いじめ問題アドバイザー」ですので、「そんなことも勉強会で出ました」と言っていたかとありがたいです。

今日お話しになったことの体験談を膨らませて文章化していただけると助かります。それをわれわれが発行している機関紙に載せたいと思っています。

共通の質問事項として、先ほど学校の信頼を得るのに、どのようなことをされたかということもお伺いしたい。今の高校生による、あるいは中学生による防犯教室のもう少し具体的な例をいくつか挙げてもらいたい、ということが要望です。もう1つ何かあったのですが…。

棚村：人選とそれをやるに至った動機などです。

石川：そうです。一番初めに申し上げました。そういうことも是非その文章に書いていただきたいということです。やるにあたって、それなりの覚悟はあったと思うのですが、その辺の心境を少し教えてほしいと思っています。

ところで、スクールサポーターの方は、任期というのはあるんですか。

江崎：今度は法律が65歳まで勤められるようになりますので、それでやはり考えなければいけないと思います。そうすると、65歳までは本人が希望すれば、間違いなく勤められるようになるかと思えます。

石川：現職ということですね。

江崎：はい。当時は60歳定年でしたので、年金は皆さん60歳からもらえていました。ところが、今の年代は61歳、62歳と聞くので、今は63歳で切っています。つまり、年金が満額もらえるまでは行こうということで、警察官の年金満額は警視以下、警部以下は比較的早く年金がもらえます。警視以上、要するに、所属長以上は65歳からもらえます。われわれもそうですが、65歳からです。ですから、やはり一番初めに先生がおっしゃった「スクールサポーター制度をなぜ作ったのか」というところですが、2002（平成14）年に神奈川県内で19万件犯罪が発生しています。その内の約40～50%は少年が犯しただろうと思われる犯罪です。自転車万引きというようなものがあります。それでは、それをどうしていけばいいのだろうと考えると、警察官増員という手があるのですが、それは不可能です。

そうすると、せっかく退職する人がいるので、その人たちを何とかまた採用していろいろな活動ができないだろうか、ということを考えました。それ

で1つの方法が、少年相談員を増やすことです。これは常勤の職員なので1人増やすのと大変なことになります。それで、いろいろな作戦を練りました。

石川：その少年相談員というのは、

江崎：常勤の心理職の人です。これを増やして、子どもたちのカウンセリングをやることによって少年非行を減らしていこうではないか。そうすると総量はどんどん減っていくだろうと考えたのですが、それだけでは足りません。それともう1つは、学校内での暴力事件が非常に多かったことがありました。警察官が学校の中いきなり乗り込むことはできません。それで何かクッションになるような人がいないだろうかということで、少年相談員という警察官でない人たちによる相談です。それからもう1つは、スクールサポーターという外からいろいろな人たちを巻き込んでいける非常勤が取れないだろうか、ということで始めました。

石川：そうすると、警察庁が音頭を取ったのではなくて、最初は神奈川県警だったのですか。

江崎：神奈川県警は比較的早かったです。

石川：いいえ、案を作っていたのは、

江崎：案は神奈川県警が最初です。

石川：そうですか。

江崎：はい。その後に警察庁から「そんな非常勤が取れるならいっぱい取れ」という話になりました。結果としては、神奈川は55人いますが、全部の警察署でそろっているところはほとんどないと思います。

石川：そうですね。すごく広い北海道で2人や3人と言っていましたね。

棚村：とても自転車では回れないです。

江崎：非常勤職員を取るのもすごく難しいです。現職を切ったりする切り札を出さなければ、非常勤を取ることはできません。要するに、予算見合いです。

石川：そうですか。

江崎：ですから、私が警務課にいたときに、「非常勤職員をいかにして取るかということを考えろ」と言われて考えた案がこのようなものです。

石川：常勤の給料と非常勤の給料を照らし合わせると、常勤何人分ですか。

江崎：3人分です。3対1はいけます。

藤野：3対1ですか。

江崎：そうすると、食堂のおばさんなどを外注することによって雇用することができるようになります。

石川：なるほど。

江崎：犯罪の増加と、それから校内暴力の増加というものに対応してどうやればいいのかというという意味合いでした。論文に書くにはナイーブな状況が実はありながらも、ただ、書こうとすると、そういう説明になると思います。非常に犯罪が増えてきて、校内暴力その他に対応するためです。

石川：文章化したものはありますか。

江崎：警察庁に報告した資料があると思います。

石川：その3人のことを書くときに、最初に今のようなきっかけがどうだったかも書いてもらわなければなりませんね。

江崎：はい。きっかけですね。それはあります。

石川：それはもう、江崎さんに書いてもらいたいですね。

江崎：今お話したようなことは警察の資料を調べてみればわかると思います。

吉満：それでは、よろしいですか。

江崎：どうぞ。

吉満：修士課程1年の吉満と申します。

石川：君は、大学の修士論文で、どのようなことを書こうとしていましたか。

吉満：「学校におけるいじめに対する警察対応の在り様」というテーマで、学校に対してその警察の活動にどのような見解があるのかを研究しています。

質問ですが、スクールサポーターの活動全般を通して質問をさせていただきます。活動をしていく中で地域や保護者、その学校のほうから敬遠されやすい活動や嫌がられる活動というものもやはりあるのでしょうか。先ほどお話に上がりました学校内の巡回もその1つだと思うのですが、そのほかにも敬遠されやすい活動といったものはあるのでしょうか。

C警察署：いや、ないですね。(笑)

吉満：学校からの「こうしてほしい」という要望は活動とかに反映されますか。

C警察署：先ほど言った非行防止教室、携帯の関係のサイバー犯罪防止教室や不審者訓練など、あるのは要望ばかりですよ。来れば皆、どこにでもこや

かに応対してくれます。先生方もあいさつしますし、もう慣れたものです。

石川：それはやはり1年、自転車で回って顔を見慣れたからでしょう（笑）。

○警察署：そうです。もう3年回っていますからね。

石川：最初からではなかなかそうはいかないでしょう。

○警察署：最初はだから、不思議そうな顔をしていました。「どんな人だろう」と。前は学校に入ると名札を付けますよね。3年目に入ってからには付けるのをやめて持っていきませんでした。2年間は学校に行くときに名札を付けていました。

石川：別に開催している神奈川県地域連携研究会でスクールサポーターの話になったときに、どなたかが、学校のほうに信頼してもらうために、不審者情報を適切に流したということ話をされていました。学校のほうも自分たちに役立つ情報ですから、だいぶんげんそうな反応は薄れていくという言い方をされていました。

○警察署：不審者訓練というものがあるのですが、それは、不審者を警察官にやってもらって、不審者が侵入している状況を先生にビデオに撮ってもらいます。そうすると、教室を守っている先生方もいるわけですよ。その中で、すべて不審者を取り押さえたという具合で「じゃあ、おしまい」というかたちにするのですが、その後、先生方を全員集めて撮ったビデオを見ながら研修会を開きます。そして、「こういうところがいけませんでした」という話をし、「また来年やりましょう。一步一步進んでいけばいいですから、失敗はしょうがないです。いきなりやってみようまくいくはずがないんだから」ということも話しています。毎年そうやっていき、だんだん上手になっていくという感じでいいと思っています。最初は教室に不審者に侵入されてしまったとかいうこともありましたが、先生が人質に取られてしまったこともありましたが、それはそれで失敗もあるのだからということで、一応、皆で反省して、「来年はこうしないように。あとは先生方で協議してもらって、じゃあ、また次やるときはうまくいくようにしましょう」というやり方を私は不審者訓練の場合ではやっています。

石川：お伺いしたいことがあります。訓練よりは不審者情報です。とある方によれば、例えば、「この地域に最近こういうおかしなのが出ていますよ」という

ことを言うことによって、学校が食いつくそうです。また、それだけでは駄目で、『だから、こういうふうにしましょうよ』という知恵を授けると、学校のほうは、やはり例の大阪の学校の問題がありますので、非常に関心が高いですし、乗ってくる」という話をされていました。脅しては困りますが。

A警察署：あと、校内巡回は、やはりやってみると結構、授業離脱、要するに、教室から出てしまってフラフラする子がいます。行ってみると、私の感想ですが、先生の数がまったく足りていません。

私はスクールサポーターとして見ると「これじゃあ大変ですね」と思うことがあります。

棚村：もともと、学校は「自分たちの生徒や児童は自分たちで解決しよう」という気持ちが強すぎるので、逆に言うとそれを超えたものとの連携というのはなかなか難しいです。ですから、福祉と警察もかつてはそうでしたが、やはり捕まえるほうと守るほうとで、連携しないと問題解決ができない状況があるということでしょうね。

A警察署：そうです。区の学校支援担当とタイアップして、学校から児童相談所への通告に力をいれています。先ほど言った不審者の情報などもこちらが出してやっていくと、非常に喜んで受けてくれます。そうすると、「またこういうこともお願いします」という感じで流れはできます。

棚村：僕から1つだけ質問があります。スクールサポーター以外にも、学校にはスクールカウンセラーという心理の支援をする人がいます。最近ではスクールソーシャルワーカーというのもあります。そのスクールサポーターとスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーというのがお互いに協力しながら、予防はかなり効果を上げているというのはよく分かります。しかし、それぞれの多職種の専門職が、学校という現場で起こっている実際の問題で連携をされたりして解決したりフォローアップすることとかはありますか。

B警察署：本当に、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーとあまり接点がないのです。私の考えとしては、そのような方は、個人に対してのタイアップだと思うのですが、私は学校全体、子どもたち全体として何かと必要だと思います。特に問題のある子に対しては個別にお話しすることもあるのですが、一応やはり全体を対象にやらせていただいています。

藤野：つまり予防の部分をやっている。そして、環境をどのように整えるかというところを、このスクールサポーターの方たちがやっていますね。

棚村：そうです。やっている感じですね。

藤野：そして、もっと個別に、いじめっ子でも根っこの部分でいろいろな問題があったりすると、スクールカウンセラーに、あるいはもしかすると、少年相談・保護センターのほうに行っているとかになりますか。

B警察署：ということになりますかね。個別になってくると、また複雑になります。

棚村：そのような感じですよ。そういう人たちもかかわってきます。

藤野：例えば、一緒にケースカンファレンスをするとか、「この地域や学校をこうしたいから」というので勉強会を一緒にやることもないですか。

棚村：ありません。

石川：このサポートチームを立ち上げたというのがありますね。この中のメンバーにはスクールカウンセラーだとかが入っていませんね。

B警察署：ないですね。

藤野：それはやはり非常勤だったりするということがあるのですよね。スクールカウンセラーは週1で行ったりしています。

江崎：ずっといるわけではありませんし。

藤野：そうですね。

江崎：それから、学校に直接かかわりがいい人もいて、個別の児童を対象にしてしまっているので、学校と少し離れています。

棚村：そうです。むしろ、守秘義務やいろいろなことがあります。

B警察署：サポートチームのやっているところでも、サポートチーム全体の活動と個別ケース会議をやっているところもあります。

棚村：ケース。なるほどね。

石川：ですから、これは虐待に関しては要保護児童対策地域協議会というものができているわけでしょう。

B警察署：はい。それも使えます。

石川：法律に守秘義務などもきちんとうたわれているわけですから。こうしたことでも、名前をどうするか、学校でなく協議会みたいな名称にして、法律

化してしまって、そのような人もメンバーに入ってもらってもできなくはないですね。

棚村：ですから、予防の活動で非常に皆さんが頑張っておられるので、何か問題が起こったときも、皆さんがコーディネータ的に介入したり相談を受けるということです。

藤野：そうですね。

棚村：普段の小さなところから、逆に言うと保育園や小学校・中学校とつながってくる流れの中でもう皆さんは見ておられますから。

ですから、つながが一番、今の段階では重要です。

江崎：ツールがたくさんあります。

棚村：警察のソフトなタッチですね。

江崎：そうです。

藤野：ここの事例だと、結局、そのいじめの中心になっていた人というのは、少年相談・保護センターと、そういう心理のほうにやったということですね。

C警察署：そうです。

棚村：スクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーとか個別事案の連携はどうですか。

藤野：環境としてはいろいろされましたが、その個別の問題についてはそちらでつなげるということですよ。

C警察署：そうです。つなげてしまうんですよ。

石川：僕もそう思いますよ。

B警察署：相談のノウハウを持っているわけではないです。

藤野：そうですね。

B警察署：あくまでもスクールサポーターはプロデュースする、そのような企画をする、いろいろなものを作っていくことです。それで自分だけではなくて、かかわりのある人と協力しながら一緒にやっていくというのが多分、パイプ役というところで与えられた任務だと思います。

そのようにして今後も、自分だけではなくて、周りを巻き込んで抱きかかえながら一緒にやっていければいいなと思っています。

江崎：間違いなく最初に企画したものより、ずっとバージョンアップしていま

す。そこまで考えずにやりました。

石川:時間がないので、「ならぬことはならぬものです」で終わりにします(笑)。

一同:お疲れさまでした。ありがとうございました。

【別添：出席者一覧（肩書は当時のもの）】

- ①石川正興（社会安全政策研究所研究所員・所長，法学学術院教授）
- ②小西暁和（社会安全政策研究所研究所員，法学学術院准教授）
- ③棚村政行（社会安全政策研究所研究所員，法学学術院教授）
- ④藤野京子（社会安全政策研究所研究所員，文学学術院教授）
- ⑤宮古紀宏（社会安全政策研究所研究所員，教育・総合科学学術院助教）
- ⑥渡辺 巧（社会安全政策研究所招聘研究員，
財団法人日本道路交通情報センター常勤参与）
- ⑦宍倉悠太（社会安全政策研究所事務局員，大学院法学研究科博士後期課程）
- ⑧三枝功侍（社会安全政策研究所事務局員，大学院法学研究科博士後期課程）
- ⑨吉満圭祐（社会安全政策研究所事務局員，大学院法学研究科修士課程）
- ⑩江崎澄孝（前神奈川県警察本部生活安全部長）
- ⑪阿部敏子（神奈川県警察本部少年育成課少年相談・保護センター所長）
- ⑫扇山 剛（神奈川県警察本部少年育成課課長補佐）
- ⑬神奈川県警察A警察署スクールサポーター
- ⑭神奈川県警察B警察署スクールサポーター
- ⑮神奈川県警察C警察署スクールサポーター
- ⑯森 康（横浜少年鑑別所統括専門官（考査担当））
- ⑰爲田世良（早稲田大学法学部学生）